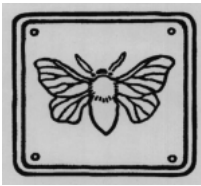


## あつぎと養蚕

かつて厚木の主産業の一つでもあった養蚕ですが、それを支えていたともいえるのが養蚕教師と呼ばれる人々。温暖飼育法などの新しい技術の導入に彼らが果たした役割は大きいものがあります。実際に彼らがどのような技術を、どこから導入してきたのかという問題についてはすでに様々な人が考察し、成果もあがっています。ここでは、厚木市下荻野で生まれ育ったある養蚕教師について遺された資料から、その足跡を具体的に追ってみましょう。



養蚕教師が活躍する以前にも、養蚕は盛んに行われ、各種の養蚕書などによって養蚕家たちは様々な知識を仕入れていました。厚木市周辺では、荻野山中藩、6代藩主・大久保教孝が作成させた「養蚕要略」（文化2年）がよく知られていますが、これは、渋川の蚕種商人・吉田友直の「養蚕須知」の内容をもとに、当地の養蚕に適応、不必要な部分は省くといった処理を施し、技術を導入させ、藩内の養蚕を振興させるためのものでした。

### お殿様が薦めた養蚕書

「養蚕要略」の項目として、蚕性、扱種、養種の貯蔵、浸臘水、掃室、下蟻（掃立）、初眠（しじみやすみ）、二眠（たけやすみ）、三眠（ふなやすみ）、四眠（にはやすみ）、冷年眠蚕法、養蚕豊凶説、蚕性に合わない取り扱い方の十ヶ条、諸毒、備考 桑粉添食があげられています。

座間美都治氏によれば、「養蚕須知」との相違点としては、下蟻（掃立）、擘黒の方法に「須知」以前の養蚕書にはない方法が取上げられており、中国の「農桑輯要」に拠ったものとされています。後者で取り上げられた方法は、多湿の場合効果がある方法だといえます。その他、扱座の基準（簡単な記述となっている）、眠起弁色、飼育日数（要略は清涼育）、上蔭などに違いがみられます。その違いは、内容を春蚕に限ったこと、寒冷の場合の飼育を強調したこと、触書であるため省略の多いことの三点に要約されます。

「養蚕要略」の出典については諸説ありますが、ともあれ、江戸時代の養蚕書は、蚕種商によって書かれることが多く、それに伴って技術の導入がなされたのは事実です。

### 政治結社とも重なる荻野・相愛社

明治以降になると、厚木市域においても、相愛社（荻野村、写真）、順気社（依

知村山際)といった養蚕結社を中心にして外部からも技術者を介し、新しい技術が導入されるようになりました。新しい技術に伴って養蚕具、養蚕技術も導入、改良されることになったのです。

例えば、相愛社、順気社以前のことになりますが、明治16年、下川入(現厚木市)の佐野安太



郎は、海老名在住の大島正義(高揚社初代社長)の指導を受け、常時十分な成果を得ることはできなかったとはいえ高温育(養蚕飼育法)の普及発達に力を入れていました。また、同時期に棚飼いと呼ばれる飼育法も、エビラ、エガというカゴとともに、この地に導入されたのです。

その後、相愛社、順気社が結成されていくのですが、これらは、明治期の自由民権運動との関わりから政治結社としての側面をもち、愛甲講学会、自由党との関連もありました。色川大吉氏によれば、「神奈川県愛甲郡の相愛社は、もともと農事研究会であったものが、愛甲講学会をかかえ、自由党の母体に転換」したものだといいます。しかし、この記述は、同社の動きを経時的に追っていくと、正しくは「政治結社」から「伝習所」へ転換か、或いは同時進行的なものであったのではないかと思われま

す。相愛社の結成については、「東京横浜毎日新聞」明治15年2月3日号の関連記事によると、「9月に入ると小宮の周辺でも、郡役所主席書記の黒田黙耳らが中心となって、政社結成の準備を始めました。こうして翌15年1月には、社則も決まり旧暦正月の2月1日を期して、厚木町で盛大な創立懇親会を開くことができた」とあります。そして、その後の相愛社は、明治16年3月頃、小宮、難波ら9名の自由党入党により活動を停止してしまうのです。しかし、大阪事件が起こった明治18年、再び養蚕伝習結社としてその名が登場しました。これが、同社が「政治結社」から「伝習所」へ転換したのではと思われる所以です。

さて、相愛社についてみてみましょう。同社は、明治18年、神崎正蔵、難波富雄らを中心に荻野村に生まれたものです。神崎正蔵の屋敷に建設された伝習所は、相当大規模なものであったといいます。この相愛社は、西ヶ原蚕業講習所出身の池田孫右衛門、埼玉県人・関谷重次郎を教師に招いています。しかし、相愛社の活動は十分な効果を上げることができないまま、解散となりました。その原因の一つとしては、西ヶ原蚕業講習所出身の池田が温暖育を、関谷は高

温密閉による飼育を主張、激しい争いがあったことがあげられています。その後、明治 24 年に関谷は中荻野で伝習所を経営、関谷流飼育法（高温密閉）の普及に努めたが、うまくゆかず閉鎖されました。

### 社員800人を越えた山際・順気社

一方の、順気社は、明治 21 年、梅沢忠一郎、中丸和三郎、林弥五郎らを中心に依知村山際に生まれました。同社は高温密閉法の弊害が問題になりはじめた明治 22 年に、伝習所を建設、明治 31 年には社員 800 人を数えるほどに成長しました。その活動は、「生徒を募り、農閑名士を対象に“講習講話会”を開き、地方に指導員を派遣」し、火力を適当に使用する温暖飼育法の普及に大きな役割を果たしたといえます。また、蚕種検査規則の検査法の開発者であり、「蚕の夢」「微粒子病之顛末」の著書をもつ佐々木長淳の門弟である群馬県人・松井清三郎を教師に招いています。妻田村（現厚木市）の星野岩吉の日記である「星野日記」、そして明治の自由民権家として著名な小宮保次郎の日記にも、この順気社の活動に参加した記録が細かく記されているのです。また、星野岩吉は東京（隼町六番地）にあった佐々木長淳の屋敷を訪れるなど、個人的なつながりもあったようです。

この順気社には他府県からも伝習生が集るようになり、愛甲郡、高座郡の蚕種製造家では順気社出身者が良好な成績をあげていたといえます。また、小林升が「蚕種検査員」として訪れた先には、順気社だけでなく足柄郡金子村の順気社分社もありました。

一方、公的な機関としては、明治 17 年に蚕病試験場を明治政府が設置、同 29 年に蚕業試験場を蚕業講習所に改めました。21 年の本資料巻末の伝習及第者名簿には、神奈川県内の 17 名が含まれ、厚木市域では小野村 吉沢滝雄、上依知村 小林栄太郎の 2 名が記されています。

### 厚木に集中する蚕系関連施設

下図は、『神奈川県之蚕絲業』（大正 2 年 = 1913）の裏表紙です。大正初期の時点ですでに、厚木町には蚕業取締所、蚕種同業組合、実業補修学校が置かれています。後に、藤沢にあった原産種製造所が海老名へ移設され、「厚木町全図」（昭和 3 年 = 1928）ではさらに若尾乾燥場・若尾銀行、神奈川県繭検定所等の関連施設の記載があり、県央のみならず神奈川県の養蚕業の中心となったことが分かります。

また、展示資料の『新編養蚕教科書』（明治 40 年 = 1907。飯田 孝氏蔵）の最終頁に「愛甲郡立第四実業補修学校生徒第一年生」と墨書されています。先の『神奈川県之

